

📍 出会いが生み出す感情的な興味に従う方向作り

篠原 稔 ジョージア工科大学

ジョージア工科大学理学部准教授。東京大学教育学部卒業、教育学研究科修士、総合文化研究科博士。東京大学教養学部助手、コロラド大学客員助教授、ペンシルヴァニア州立大学研究員、コロラド大学シニア研究員を経て、2006年より現職。ブログ「篠原稔のアメリカ人プロフェッサー生活」<http://blog.livedoor.jp/shinojpn/> shinohara@gatech.edu



今でこそアメリカの大学プロフェッサー職で身体運動科学を研究し教育しているが、元は文系である。高校時代に留学生たちとつるんでいた流れで、国際関係論コースに進んで外交官を目指そうと東京大学の文科II類に入学した。しかし最初の授業に出た瞬間「面白くない」と興味を失った。そういう場合、経済学に進むのが文科II類の本流だが、経済学も面白くないというピンチに陥った。進学先を決める2年生のとき、そのときの感情的な興味に従う決断が第1のターニングポイントを作った。自分のトライアスロン競技力を高める方法を模索していたころ、「スポーツの栄養・食事学」という本でスポーツ科学に初めて出会って興奮したのをきっかけとして、上記の二者択一とはまったく別の体育学コースに進路を決めたのだ。将来は体育教官になれば楽しそう、と入学当初とはまったく違う方向だ。

進学当初は、確立した知識の吸収を貪欲に楽しんだ。それが対象内の未知を探る科学研究という方向に興味に移ったきっかけは、先進的な科学研究に挑む先輩院生との出会いだった¹⁾。運動する身体は「ど

うなっているんだろう？」という謎解きの新しい知を追求する宝探しに接し、大学に入って初めて知的好奇心が刺激され、のめり込んでいった。身体運動の科学研究者というキャリアを知ったのはこのときであり、私の第2のターニングポイントだ。決め手は何よりもワクワクする楽しさだ。子供のころ、研究者を意識したことはなかったし、それは漫画で見るモジャモジャ頭のハカセにすぎなかった。ただ、クワガタ採りや魚釣り、そして探偵小説が大好きだったので、小さいころから謎解きの宝探しに魅かれていたのだろう。

その後、体育教官兼科学研究者の任期なし助手（現在の助教相当）職を得て、立場や収入的には安定した。しかし体育実技や雑用に追われ、研究も国際レベルに届かない国内レベルで安定してしまっていた。そんな34歳の秋、アメリカのコロラド大学に1年滞在できる在外研究の機会に恵まれた。そこで出会ったのは、質の高い研究活動に集中した日常を過ごす国際レベルのプロフェッサーたちであり、職務も時間も刺激も日本とは比べ物にならなかった²⁾。研究能力と環境が



中途半端な職のまま日本レベルで研究を続けても先がない、と自らの能力と立場に失望する大ピンチに陥った。より大きな宝探しが楽しめるよう、より高い次元で研究がしたい。この出会いから来る心の叫びが、より高いレベルのキャリアをアメリカで作ってほしいという、第3のターニングポイントとなった。新たな方向に向かうとなれば何かを失う恐れもあるが、心に響く興味に従う一点豪華主義に基づけば、方向は決めやすい。渡米数カ月後に日本の常勤職を辞してアメリカの研究者としてキャリアを作ることを決心し、アメリカ標準の研究者を目指すトレーニングを開始した³⁾。

振り返ってみれば、何かを計画したわけではなく、

刺激的な出会いから生まれた心に響く興味に従った方向への行動が、創造的なターニングポイントを作り、成功に導いてくれた。次なる出会いが楽しみで仕方ない。

参考文献

- 1) 篠原 稔:「自分だからこそ」すべき研究は何なのか—信念と行動力、それが挑戦になっていく、月刊スポーツメディスン 195号 pp.11-14 (2017)。
- 2) 篠原 稔:頭脳国際循環時代に若手研究者が育つための基本三要素:職務と時間と刺激、学術の動向 9月号, pp.60-62 (2008)。
- 3) 篠原 稔:体育教官のアメリカ標準研究者トレーニング、日本生理学雑誌 68, pp.446-447 (2006)。

若手へのメッセージ

キャリアに迷ったら、過去からつながって見えてくる(しまう)方向ではなく、その時々ドキドキする未来に向かって行きましょう!

ここに掲載した著作物の利用に関する注意 本著作物の著作権は情報処理学会に帰属します。本著作物は著作権者である情報処理学会の許可のもとに掲載するものです。ご利用に当たっては「著作権法」ならびに「情報処理学会倫理綱領」に従うことをお願いいたします。